

<b>Title</b>	早稲田大学における 4 学期制(Quarter 制)導入の背景と目的
<b>Author</b>	田中, 愛治
<b>Citation</b>	大阪市立大学大学教育. 13 卷 1 号, p.11-24.
<b>Issue Date</b>	2015-10
<b>ISSN</b>	1349-2152
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学教育研究センター
<b>Description</b>	大阪市立大学第 21 回教育改革シンポジウム : 「日本型 4 学期(Quarter)制について」
<b>DOI</b>	10.24544/ocu.20171218-074

Placed on: Osaka City University

## 早稲田大学における4学期制（Quarter制）導入の背景と目的

田中 愛 治  
早稲田大学理事（教務担当）  
政治経済学術院教授

TANAKA Aiji

ただいまご紹介にあずかりました早稲田大学の田中でございます。

本日はお忙しいところをお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。また、西澤学長にはご丁寧なお話をいただき、飯吉先生にもご丁寧に紹介していただきまして、まことにありがとうございます。

時間の関係もありますので、早速本題に入らせていただきます。最初に一言、お断り申し上げておきます。ご紹介いただいたとおり、私の専門は政治学でございます、教育学については素人でございます。しかしながら、大学の運営に携わりながら教育の改革を進め、実践的に学んでまいりました。本日の話はある意味では素人の話だと思いますが、早稲田大学がどのような苦勞をしているかについてお話し申し上げて、少しでもお役に立てればと存じております。

〔以下、映像による講演〕

### 4学期制導入の目的と目標

4学期制導入の目的と目標については、4つに分けて考えております。

第一に「在学生のサマースクールへの短期留学」についてです。何人かの学生から、「大学1年の夏や、1年から2年になる間の春休みに、あるいは2年目の夏に、短期留学で3～6週間英語の研修に行ってきました。次は専門科目を取りたいと思ってアメリカやイギリスの大学のサマースクールを調べてみたところ、海外の授業は6月から開始、対して早稲田の授業は7月末まで継続するので、時期が合わなくて海外に出ることができません。せっかく英語の勉強をしているのに、専門科目を英語で勉強したくても全然できないんです。この状況を何とかしてください」と言われたのが最初のきっかけでした。2003年、2004年ぐらいから、学生たちからそのような声を聞いていました。今は、文部

科学省が旗を振って盛んにグローバル化をうたっておりますが、当時は、今ほどには日本全体でグローバル化がうたわれていませんでした。本格的に学生を海外に送り出して、日本国籍ではない海外の教授陣に教えてもらうというところまで踏み込むには、まだごく部分的な活動であり、全学的・全国的には広がっていま

### 4学期制導入の目的と目標

- (1) 在学生のサマー・スクールへの短期留学
- (2) 海外の学生の早稲田のサマー・スクールへの参加
- (3) 海外の教員が早稲田のサマー・スクールで教える
- (4) 早稲田から留学した学生の復帰をスムーズにする

せんでした。私が教務部長になったのは、2006年11月でした。そのときにも熱意のある学生の声を複数聞きまして、何とかしたいと思ったのが最初の動機でした。

第二に、「海外の学生の早稲田のサマースクールへの参加」についてです。早稲田は海外に非常に多くの協定校を持っていて、学間協定が460を超えています。学部や研究科同士の協定を入れると700になり、相当幅広く、また多様な交流をしています。中でも親しい大学からは、早稲田でもサマースクールで集中講義をやってくれないか、うちの大学から20人ほど送りこみたいのだけれども、というお話があります。サマースクールは、海外の学生の夏休みにあわせて、だいたい6月から7月上旬に行われるものです。ところが、そのころ早稲田では前期の授業を普通に行っていますので、教室はほとんど満杯です。そこで、国際部で海外からの学生を受け入れて、鴨川のセミナーハウスと軽井沢のセミナーハウスにバスで連れていって、何とか時間を都合してくれた先生たちが交代で英語で集中講義をしていました。せっかく海外から学生が来て早稲田で勉強しているのに、早稲田の日本人の学生が彼らと机を並べて勉強する機会が全くない、隔離された国際化なわけです。それでは仕方ないのではないかと、ということがございました。

第三に、「海外の教員が早稲田のサマースクールで教える」についてです。早稲田では8月2日くらいまで前期試験を行っていますので、サマースクールを始めるとしたら8月3日くらいからになります。すると、欧米の大学の先生方にとっては、「日本に行って教えるのは6・7月で、8月は休暇ですよ、なのに暑い時期の東京の8月にどうして行けるんですか」という感じの事になりまして、なかなか実現しにくいのです。「6月ならば日本に行けるのに」というお話は何人も海外の先生から伺っているのですが。

最後に、「早稲田から留学した学生の復帰をスムーズにする」についてです。早稲田から留学した学生の様相についても、だんだんいろいろなことがわかってきました。北米や北京大学、シンガポールに留学した学生の渡航は9月で、欧米のセメスター制ですと、5月には学期が終わります。アメリカのクォーター制でも6月7日頃には終わります。すると、学生たち

が日本に帰ってくるのは、6月上旬か中旬ということになります。早稲田の秋学期の始まりは9月27日くらいですので、その時期に戻ってきた学生は丸3か月間ぶらぶらしている、世界旅行しているか、アルバイトをしていて、時間が無駄になっています。この後オセアニアのオーストラリア、ニュージーランドのこともお話しますが、いずれにしても同じような状況ですので、これを何とかしてあげたいと思っていました。日本に帰ってきた学生たちは、授業に出たいんですというのですが、大学には非常にかたい官僚的な壁がありますから、教職員としては、「あなたは今年度は留学というステータスです、したがって早稲田大学の授業は取れません」と学生に通知しなければなりません。継続して勉強したいと思う学生が帰ってきたとき、もっと勉強できるチャンスを与えることはできないかと考えたことも動機のひとつです。

## アメリカの学期制と秋入学制

ここで、アメリカの4学期制・クォーター制について説明いたします。

アメリカの大学で学んだことがある早稲田の同僚の教授たちは、アメリカのクォーター制というものは私が言っているのと違うということを楽しんでいるように見えます。

### アメリカの学期制と秋入学制

- ★アメリカにおけるセメスター制とクォーター制:
  - セメスター制: 秋学期9月初-12月初旬  
春学期= 1月初旬-5月中旬(16週間+試験週間)  
夏学期(サマースクール)= 6月初旬-8月中旬
  - クォーター制: 1年を4つに分けている  
秋学期=9月末-12月中旬,冬学期=1月初-3月末,  
春学期=3月末-6月初旬,夏学期=6月半-8月半
- ★秋入学制度: 各学年度が9月始まりで6月卒業  
(3年+9ヶ月で学士号を授与される)

ます。アメリカの大学におけるクォーター制では、1年を4つに分けています。アメリカの大学におけるセメスター制では、実は1年を3つに分けています。9月に始まって12月に終わり、クリスマスの休みをとってから、1月からスプリング・セメスターが始まるというのがアメリカの大学であります。

では、クォーター制の場合はどうなっているかとい

うと、9月から秋のクォーターが始まり、12月10日ぐらいには秋のクォーターが終わります。それから冬休み、クリスマス休みを過ごして、1月3日ぐらいから冬のクォーターが始まり、3月末か4月頭にスプリング・クォーターが始まります。それが6月7日ぐらいに終わります。そこからサマースクールに入るということになります。これがアメリカのクォーター制です。夏学期は6月半ばから8月半ばです。

セメスターの場合は、今申し上げたように、1月初旬から5月中旬までの16週間と、試験週間があって、サマースクールが6月初旬から8月中旬まであります。サマースクールの始まりの時期にはあまり違いはありません。セメスター制の大学でも、6月に入ってからサマースクールが始まるケースが多いと理解しております。

そうしますと、6月の1週の終わりぐらいのところで夏の学期に入れば、欧米のサマースクールに間に合います。ここが1つのみぞだろろうと思いました。これを日本の学年度、4月から始まって3月に卒業する学年度で考えるにはどうすればよいかということで、頭をひねったわけです。

2年ほど前に、東京大学が、秋学期・秋入学について大々的におっしゃって、財界も一気にそれはよいとおっしゃったわけですが、実際には非常に難しいです。この件について、文部科学省のお話をかなり丁寧に聞きました。もし9月入学で、例えば6月・7月卒業ということにすると、3月に高校を卒業したあと4月から7月までのずれをどうするのか問題になります。3月に卒業して秋に入学すると、その間半年空くわけですね。

東京大学は、ギャップ・タームというお考えをお持ちでした。しかし、文部科学省からは、小学校に至るまで全部秋入学にすることが可能かどうかについては、できない理由が2つあると非公式に聞いています。1つは、もし前倒しにすれば、4月に6歳で入学してくる子どもたちを、その半年前の9月に入学させることになります。するとどうなるかというと、9月から入学した1年生と、その前の学年の1年生は、9月から3月末までかぶるわけです。すると、教員がその1学年だけ二重に必要になり、翌年は2年生のとこ

ろで半年二重に必要になって、3年目は3年生のところでも二重に必要になる、このための手当ては、全国の小中高ではまずできないだろうということでした。ならば半年遅らせて、3月に卒業して9月に入学ということにしますと、小学校の入学がある年だけ、前の年は4月に入学した子の後は、翌年9月、1年半後に入ってくるわけです。つまり、4月から8月末までは授業料が入らず、私立の小中高でつぶれるところが半分は出てくる、その6カ月間の収入なしでは教員の給料を全部賄うことは不可能であろうということでした。私立の学校ではこのような状況がありますので、秋学期制を日本全国に本当に導入するのは難しいのです。東大の先生方は、「東大だけでやるから無理なのであって、全国でやればできるんですよ」とおっしゃるのですが、具体的に考えると、現実的には非常に難しいのです。

### 秋入学制とアメリカ型4学期制の壁

そこで我々が前々からずっと考えておりましたのは、今の日本のアカデミック・カレンダー、学年度に従いながら、欧米とのインターフェースをつくることでした。その第1歩として私が考えたのは、4月から始まって7月末、もしくは8月1・2日ぐらいまでのセメスター（15週）を全学で一貫して整備することでした。早稲田では、2009年4月から、授業を必ず15回確保するようにということで、15週間の授業と1週間の期末試験、計16週間を確保しました。秋についても、15週間の授業と1週間の期末試験、計16週間を確保しました。

欧米とのインターフェースの第2歩目としまして、私が教務部長になって3年目に入るところにクォーター制の検討を始めました。日本でクォーター制を実施する場合には、1学期を半分に分けられないかと思っておりました。半分に分けるためには15週間では困らるだろう、16週間にして、8週間ずつに分けたいと思っておりましたので、大学教育の質保証の15週間プラス期末試験の1週間で1セメスターとも合致します。

先ほど秋学期だけでは解決できない問題と申し上げたのはこちらです。秋入学の欠点は、やはり、欧米のサマースクールと合致しないことにあります。それを、

### 秋入学制とアメリカ型4学期制の壁

- ★秋入学制度だけでは解決できない点：
- 日本での秋入学では、2月の入試期間、3月末の高校生の卒業を考慮すると2学期制になる。秋学期9月～1月末、春学期4月～7月末
  - 欧米のサマースクールと合致しない。
  - アメリカのクォーター制をそのまま導入すると、6月初旬からのサマースクールには合致するが、2月の入試期間をまたいで冬学期をおくことになり、現実問題として実施不可能。

欧米のサマースクールに合致させる、もしくは、6月に卒業して、6月半ばから欧米の大学のサマースクールに入って、9月から大学院に進学できるようにしようとしても、秋学期をそのまま導入しただけではできません。考えなければならないことがいくつもあると思っていました。それから、日本では、特に私立大学の場合、2月入試が非常に重要です。したがって、入試期間をまたいで冬学期を置くことは現実問題としてはできないと考えております。早稲田だけではありません。関西でいえば関関同立のような大規模私立大学におかれては、冬の1週間もしくは2週間にわたる入試期間が非常に重要です。早稲田大学では2週間弱、ほぼ丸々2週間使って、13学部が毎日、日付を変えて入試を行っておりまして、トータルで約10万人が受験しております。私立大学としては、この受験料収入もかなり重要だと思います。

後でお時間があればお話ししますが、いずれは一般入試という形態の入試から卒業する 때가来るだろうと思います。偏差値といいますが、受験学力だけで優秀な学生を選ぶ方法は、もう限界にきています。本当にグローバルな人材を選ぶためには、何か違う選抜方法が必要であることはわかっておりますが、直ちに今の受験をやめるのは非常に危険性があると思っております。徐々に今の形態から抜けていこうとしますと、2月の入試期間はある程度尊重すると考えて、2月10日ぐらいから3月末までは学生にとっては春休みとし、大学にとっては入試期間かつ、新学期の準備をする期間にあてるということになります。

### 早稲田型クォーター制（4学期制）

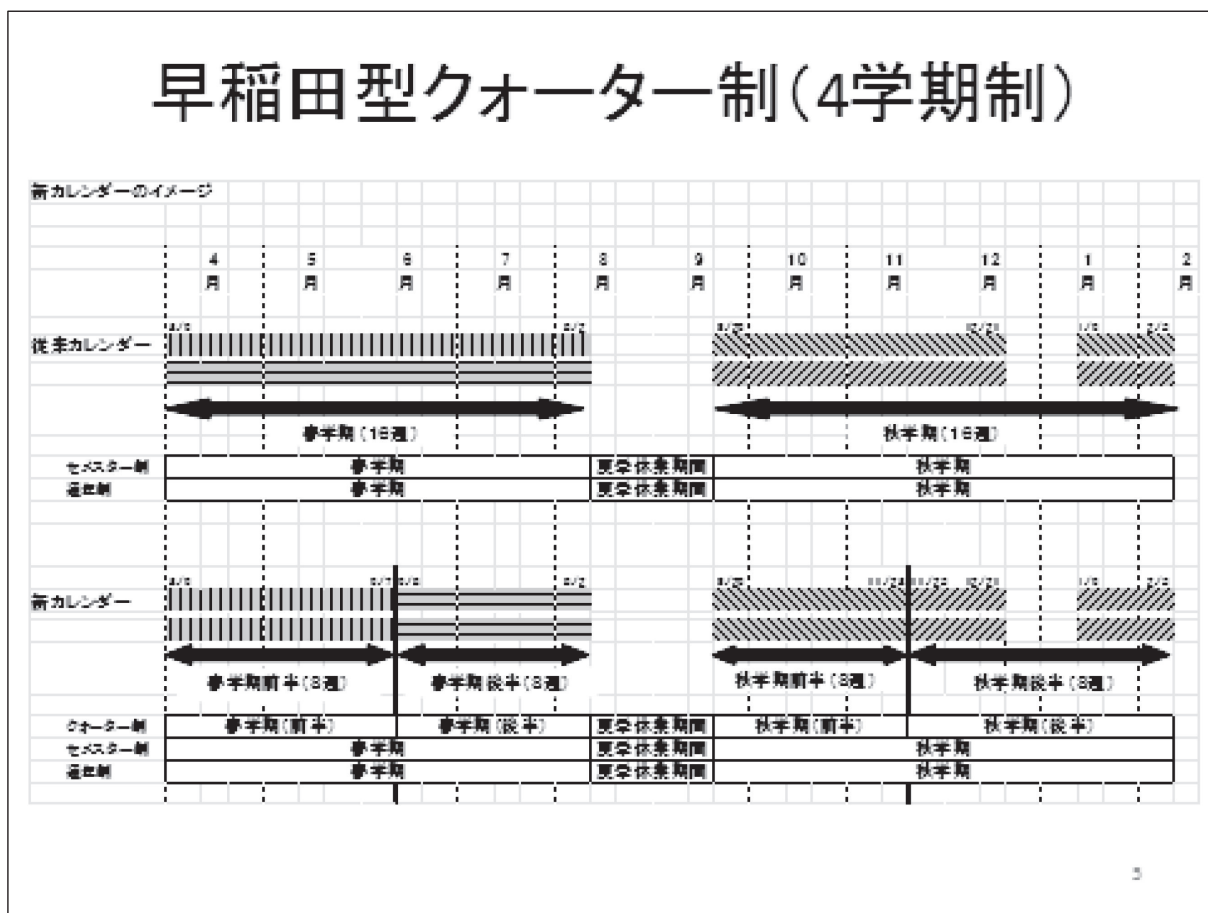
早稲田型クォーター制の内容について紹介します。従来のセメスターは、先に申し上げたように、4月から始まって8月2日までと、9月26日から始まって12月21日までです。2013年度のカレンダーでしたら、12月21日で冬休みに入って、冬休みの後1月6日から後期の学期が始まって2月5日までとなっています。これに合わせてクォーターを区切ると、ちょうど6月7日で切れます。6月8日にまた始めて8月2日に終わる、9月26日に始めて11月24日に終わり、11月25日から始めて2月5日に終わるということになります。ここで8週ずつに区切ればちょうどうまく切れて、都合よく収まります。先ほど申し上げたように、ちょうど6月8日あたりから、欧米のサマースクールに行くことができます。春の前半でクォーターが終わったあと、次のクォーターは早稲田での授業を履修をせずに、海外に出て勉強ができます。特に欧米やシンガポール、北京大学などには行きやすくなると思います。

秋学期の方についてです。ニュージーランドとオーストラリアは、大体2月の初旬から新学年度が始まりまして、終わるのが11月20日ぐらいです。ですから、サマースクールでも1年間留学した場合でも、夏休みはオーストラリアは11月下旬から始まるわけです。そうしますと、この9月26日から11月24日ぐらいまでで秋の前半クォーターを終えた学生は、オセアニアの大学のサマースクールに行こうと思えば後半のクォーターを使って行けるということになります。

留学から帰ってきた学生のことも考えなければなりません。欧米圏でしたら今は大体、7月の終わりから8月ぐらいに海外に行って、ガイダンスを受けて、9月から授業を受け始めるわけですが、大学によっては8月29日や9月1日からセメスターが始まります。クォーター制ですと9月27日頃から始まります。いずれにしても、9月1日の前後から海外に行って、約9カ月間勉強しますと、翌年の5月に終わることになります。9月にアメリカに行くとする、クォーター制ならば第3クォーター、セメスター制ならば第2セメスターが終わったのち、留学していた学生たちは6月の初旬には日本に帰ってくるということになりま



# 早稲田型クォーター制(4学期制)



す。それらの学生にとっては、大学が何も対応しなければ9月末までの約3カ月以上の間が宙ぶらりんになってしまうわけです。

オーストラリアに行くとなると、1月の末、学期の終わりまでかかるなら2月5日ぐらいには行くことになります。すると、留学した学生たちが帰ってくるのは翌年の11月20日ぐらいになって、11月下旬から4月5日まで、彼らは授業を受けることができないわけです。約4カ月以上あいてしまいます。

しかし、早稲田型クォーター制にしますと、オセアニアに行った学生が11年半ばに帰ってきたとき、冬のクォーターに間に合って、続けて勉強することができますと考えています。欧米に行った学生にもオセアニアに行った学生にも対応できます。韓国の場合は3月から新学期が始まりますので、ほとんど問題なく日本とのインターフェースがとれています。

## 早稲田大学 4 学期制導入の経緯・目的

クォーター制を導入するにあたりまして、2008年10月に、アカデミック・カレンダー検討委員会を立ち上げました。私が教務部長でその座長を務めて、各学部の先生方に来ていただいて、実務方に徹底的に世界中のカレンダーを調べてもらいました。そして、早稲田型クォーター制であれば、韓国も欧米も、ほかのアジアの国々、またオセアニアも対応できるということが

### 早稲田大学4学期制導入の経緯・目的

- 2008年秋に検討開始／2012年春に導入決定
- 2009年3月初にStanford, UC Irvineでヒアリング
- 日本の小学校・中学・高校の卒業時期にも対応
- 欧米だけでなく、オセアニアにも対応
- 学生を海外のサマースクールに送り出せる
- 海外の学生をSummer Sessionに受け入れる
- 海外の教員を短期間招聘して教育を共にできる

わかりまして、これがよろしいと思いました。2008年秋に立ち上げたアカデミック・カレンダー検討委員会は、2009年10月ぐらいに結論を見ることになりました。クォーター制が一番よいだろうということになったのですが、そのまますぐには実施できませんでした。

早稲田では、学部と大学院の2階建てを合わせて学術院と呼んでいます。例えば政経ですと、政治学研究科、経済学研究科と政治経済学部を1つにして政治経済学術院と呼んでいます。また、全学の学部長のことを、早稲田では学術院長と呼んでいます。その学術院長会で申し合わせをして開始を決めるのですが、ペースはかなりゆっくりでした。2010年6月の全学の学術院長会では、ある学部が通年制で行っているのだからクォーター制の導入を決定することにしました。2011年度が終わったところで、2012年度に正式決定をして、2013年4月からクォーター制に入りました。しかしながら、このときにもあまり乱暴に導入せずに、学部による差異、科目による差異について考えました。

### 早稲田における4学期制の意義と活用例

では、クォーター制に入るまでにどういうことをしたかについて少しご説明します。

制度検討中だった2009年3月に、私はスタンフォード大学とカリフォルニア大学のアーバイン校に参りました。スタンフォードもUCアーバインも、どちらもクォーター制でしたので、この2つの大学を集中的に調査しました。

その調査の中で、スタンフォードで4名、UCアーバインで4名の先生にインタビューしました。全員が、クォーター制とセメスター制の大学を経験していました。学生として、また教員として、両方を知っている先生方だったのですが、そのうち7名の先生がクォーター制の方がいいですよとおっしゃいました。教員の立場から言うと、4学期になっている場合、サマークォーターでは普通は授業をやりません。アメリカの場合、給料が出るのは9月から5月までで、6月、7月、8月は給料が出ません。しかし、サマーンスクールで教えれば特別のお手当が出ます。出なければよそに行って、よそで教えて、給料をもらってもい

いことになっているのです。ですから、授業のオプションは9月から6月の上旬までということになります。ではその間、セメスターで教えるか、クォーターで教えるかということになります。クォーター制ですと、3つのクォーターのうち2クォーターを教えれば大体1クォーター休めるので、夏と合わせると半年間研究するための時間を確保できます。ですから、秋・冬と教えるか、冬・春と教えれば、夏と秋に休めると言っていました。半年研究ができるのと、9月から5月末まで拘束されるセメスター制とでは、研究のために費やすことのできる時間が違う、絶対クォーター制がよいというのがこの先生方の反応でした。

もう1つ、学生のほうから見ると、集中度の問題があります。私がアメリカに行って最初に驚いたことがありました。私は早稲田で通年制で勉強してきまし

#### 早稲田における 4学期制の意義と活用例

- 学部・研究科・学科目別の異なるニーズに対応  
— 歴史学・哲学vs.語学・コンピュータ実習etc.—
- 学生の集中度を増す
- 教員の負担を増やさない／研究時間の確保
- 教員も集中して教えるので教育効果が高まる

#### ★留学修了者の早期の復帰

- 9月留学の修了者が春後期(6月～)に履修可能
- 2月留学の修了者が秋後期(11月下旬～)に履修可能

たので、年に13から14科目取っていました。今は30週必要ですが、当時は1年間26週で済んでいました。しかし、26週にわたって13種類の教科書やノートを持っているわけですから、今日はこの4種類、きょうはこの2種類、翌日はこの3種類というふうに、鞆の中を毎日毎日入れかえるわけでありまして。そして、学年末に13種類の試験を受け、あるいはレポートを書きます。1週間に一度、90分の授業ですから、翌週になれば、先生も授業のことを忘れてるし、私たち学生も忘れてます。私も今、セメスター制で教えていますが、1週間前のことを思い出すのはなかなか大変で、最初の5分10分、下手をすれば15分ぐらい内容が重複します。私が学生だったころも、「あの先生、最初の15分は必ず前週の内容を繰り返しているよね」と我々は言うておりましたが、よい先生ほどそのような傾向

がありました。意図的に繰り返して学生に記憶をよみがえらせて授業に入っていくのです。そうすると、やはりそこで10分ぐらいは無駄になってしまうのです。そうしてアメリカのセメスター制の大学に行って最初に驚いたのは、週に2回か3回、同じ授業があったことです。

3単位の授業だったら3回、2単位の授業なら週2回やっていました。そうすると、14科目ではなくて、大体7科目か6科目でセメスターが終わります。クォーターになりますと、もっと集中的になります。1クォーターは10週間でしたので、大学院ですと、1学期に取る科目は、オハイオ州立大学の場合でしたら5単位で週5時間分勉強することになりますので、せいぜい週に3科目、場合によっては2科目でもよいことになります。2時間半の授業を週2回行って、10単位か15単位を取るということです。たとえば統計の授業の場合は、60分授業を週に5回行いました。毎日統計の勉強をしていたことになります。毎日60分ずつ勉強してどんどん進んでいきますから、ついていくのは相当厳しいです。しかし、統計学のように実習を含むものや、語学については、学習の速度が速くなります。また、集中して勉強しますので、よく覚えられるということもあると思います。1年間26週間ずっと13～14種類の教材を扱いながら勉強していくのと、1学期に3科目を毎日毎日学んでいくのとでは、集中度が相当違うだろうと思いました。

その意味では、全学がセメスター制に変わった早稲田では何とかいけそうな感じはしましたし、セメスター科目をクォーター科目にすることにもあまり問題はないと実感しておりました。私は2004年度くらいから政経学部でセメスターで教え始めていました。それまでは、3年生以上を対象に、政治過程論という4単位の授業を、週1回90分授業で30回、1年間かけて教えていたところを、週に2回、月、木で教えました。90分を週2回、15週間教えますので、1セメスターで4単位ということになります。そして、ちょうど8週目で中間試験を行うようにしました。通年制で16週目で中間試験があって、また16週間やって2セメスターを終える形の半分で、1セメスターの中に同じ内容を2倍詰め込んで、8週間で中間試験をやります。

では、これをクォーターにすればどうなるかと考えると、週2回として8週間で行い、中間試験を期末試験に変えれば2単位提供できます。私の場合は政治学ですから、積み重ねの順番はそれほど厳しくないのので、授業の最初の8週間をパートA、次の8週間をパートBとして、科目の順番を入れ替えて受講することも可能です。たとえば、秋の後半、冬のクォーターの授業を先に取った学生が翌年の秋に前半を取って、B→Aと学修しても内容はわかります。また、A→Bと取ってもかまいません。あるいは、先にAを取って、例えばオーストラリアに留学して、帰ってきてからBを取ることもできますし、さまざまな可能性があると思いました。セメスター制が完全に全学で開始されていれば、授業を半分に分けてクォーターの科目にできると思いましたので、全学がセメスター制になることを待ってからクォーター制にいたしました。

さて、アメリカの大学でのインタビューで、もう一つ大事なことがわかりました。スタンフォードの1名の先生だけが、クォーター制に反対しました。この先生は歴史学の先生です。彼はスタンフォード大学で学部教育を受けて、ハーバード大学で修士・博士、大学院を終えて、ボストン大学で教鞭をとって、スタンフォードの母校に戻って歴史学を教えていらっしゃいます。ハーバードとボストンはセメスター制です。彼は、自分の出身学部であり、今所属しているスタンフォードのクォーター制よりも、大学院で学んだハーバードと、最初に教鞭をとったボストンのセメスター制のほうが良いとおっしゃったのです。私が政治学を勉強していたアメリカの大学院では、クォーター制10週間の授業で大体、1科目で毎週250ページから300ページのリーディング・アサインメントがあって、それを毎週読んでくることになっていました。週2回の授業の月曜日から火曜日までに何とか読んで、泣く思いで授業に出るわけです。歴史学の学生の場合だと、500から700ページは読みます。我々の倍以上読んでいました。それだけのものを読ませて勉強させるのだから「週に4回の授業では無理だ、週に2回で16週間教えれば学生はちゃんとわかり、学生の習熟度が高くな



るので、スタンフォードよりハーバードの方が学生はよく理解できる」とおっしゃいました。

その話を聞いていると、哲学とか歴史学のような長時間かけて熟成する、大量に読む、思索する科目にクォーター制は向いていないのかと思いました。しかし、私が受けていた統計学や語学ならばうまくいくだろうと思いました。

早稲田では、語学に関してインテンシブというものがあります。インテンシブの授業とは、初修、未修外国語のことです。フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語は、週に4回授業があります。文学部でも政経学部でもやっています。文学部の先生も同じことをおっしゃっていますが、政経の先生に聞きますと、インテンシブで授業を受けている学生は、大体1年半から2年で相当できるようになるそうです。週に1回か2回の授業を受けている学生と比較すると、週4回の授業を受けている学生は3倍ぐらい伸びると言っていました。インテンシブでスペイン語やフランス語を受けた学生は、2年目が終わると、3年の秋にはフランスやスペインに留学しても現地の授業についていくことができるということです。私がフランス語を習っていた時代からはとても想像できない状況です。このように、語学インテンシブが効くということはわかっておりましたので、クォーター制がうまく合うだろうということも理解できておりました。

哲学や歴史と、語学や統計学のようなものとは大分様子が違うだろうと考えていましたので、全学で全ての科目をクォーター制にするのはいかがなものかと考えました。また、早稲田大学内では反対も結構あるだろうと予想しておりましたので、かなり柔軟に、できる学部から、向いている科目からクォーター制にしましょうと申し上げました。

そうすると、学生はクォーター科目とセメスター科目をまだらに取ることになるのではないかと、言われました。歴史学・哲学と、語学・コンピューターの実習とでは扱いが違うだろう、では、クォーター科目とセメスター科目をどのように両立実現するかを考えました。

先ほどの早稲田型クォーター制のカレンダーをもう一度見てみましょう。ある年、例えば2年目の夏

や3年目の夏にサマースクールに行きたいと思っている学生はどうすればいいか。そのような学生は、サマースクールに行きたい時と思っている時期以外のところで、クォーター科目を集中して履修して海外に出ればよいのです。そして、サマースクールと被っている学期には、セメスター科目を取らないようにする必要があります。セメスター科目を取りたいのなら、サマースクールと時期が被らない秋に取るか、前の年の春に取っておくか、帰ってきてから翌年の春に取るかです。セメスター科目があったとしても、3年の夏や2年の夏に海外に出るためにきちんと計画をもって履修計画を立てれば、海外に出ることができると思います。

課題は、9月から入ってくる海外の学生をどうするかです。国際教養学部は非常にそのようなケースが多いです。また現在、グローバル30、Gサーティーと言われているプログラムによって、政経学部、理工学部、社会科学部が、英語だけで学士号と修士号が取れるよう科目を用意しています。すると、9月から入った海外の学生が5月か6月に早稲田での学習を終え、それから海外に行きたいと思ったとすると、問題が起きます。今、早稲田は9月15日以降に卒業ができる仕組みになっています。9月15日ですと、海外の大学院にすぐに進学するにはもう間に合わないですね。

ですから今、3年と9カ月で学士号を出せるようにしていただきたいと、文部科学省にお願いしています。大学設置基準によりますと、学士号を出すためには4年間必要ということになっていますから、3年と11カ月はあり得るけれども、3年と9カ月はないとされています。下村文部科学大臣が、官僚的な理由で国際化が進むことだけは勘弁してくれと文部科学省のお役人におっしゃっているそうですし、私どももそれには賛成です。学生の目線に立って、彼らがどう学べば本当に国際的に羽ばたけるのかということを考えていただきたい。早稲田はそれを必死に考えているわけです。3年と9カ月で卒業できればそこから海外に出られますし、サマースクールから海外に進学することには大きな強みがあります。9月から正規の授業が始まる前にガイダンスを英語で受けて、サマースクールに出て、9月から本格的に授業に出ることができるからです。正規の授業では、毎週1科目300ペー

ジ、3科目取れば900ページ読むことになります。歴史学だと2100ページぐらい読むわけです。それについていく覚悟を決めるには夏から受けた方がよい、9月からいきなり放り込まれるのは結構厳しいと考えております。そういうことも含めて、我々が考えなければいけないことはまだまだ山のようにありますけれども、できることからやっていきたいと考えております。

それから、留学修了者の早期の復帰のこともあります。これは先ほど申し上げたとおりです。9月から海外に行った学生は春の後期（夏学期）には戻ってくることができる、2月からオセアニアに入学した学生は秋の後期（冬学期）から戻ってくることができると考えております。

また、クォーター制の導入で教員の負担が増えるのではないと言われていたことについてですが、それも工夫次第だと思っています。私は、同じ科目を何回も教える必要はないと思っています。秋入学してくる学生も4月入学の学生も両方いますが、私の考えでは、例えば統計学1、2、3とシークエンスでクォーター科目を開講する場合、4月からシークエンスを組めばよく、秋入学してくる学生のために秋からまた新たなシークエンスを組む必要はないと思っています。私自身、オハイオ州立大に冬から入りまして、9月から入っていない経験に基づいてそう考えています。オハイオ州立大では、シークエンスで統計学1、2、3が開講されていましたが、私はバージニアですでに統計の入門を取っていましたので、シークエンスの2から始めました。「自分は2から取ることができる」と先生に言ったとき「あなたは事前履修必要科目（prerequisite）を満たしている、よって事前履修科目を取ったと認めてあげるから、2から取りなさい」ということになりました。先生たちは、「これはあなた方を守るために決めていることであって、自分に力があるならば自己責任で取ってよい、落第しないと思うなら、ついてこれるなら、2から取ってもよい、ただ、あなたがついてこれない、もしくは、ついていけない場合を考慮してシークエンス1、2、3と順番を設けて開講しているのだ」と言っていました。ですから、どの科目から始めるかは自己責任でよいと考えています。秋から入学した学生と春から入学した学生に

対して、全て入門から並べる必要はありません。例えば英語の科目は秋からシークエンスで、日本語の科目は4月からシークエンスで並べればよいと思っています。教員はそのシークエンスに沿って必要なことを教え、学生が取捨選択してついてくればよいと思っています。

今後のグローバル教育の中では、日本語未履修で入ってくる海外からの留学生については、最初の9月は英語で授業を始めつつ日本語を必修にして、3年生になる頃には日本語がある程度できるようになって、日本語で専門科目を取ってもらいたいと思っています。あわせて、4月から入ってきた留学経験のない日本人の学生には、4月から英語を一生懸命勉強してもらって、2年生が終わって3年になる頃には、英語でも専門科目が取れるようになってもらいたいと思っています。すなわち、日本語で入ってきて英語の授業も取れるようになる学生と、英語で入ってきて日本語の授業も取れるようになる学生が、英語で学士号を取る、日本語で学士号を取るというたすきがけの2つのトラックが入り交じることも重要だと思っています。その意義は、国籍や言葉が違う学生が机を並べて勉強することにあると思っています。それが可能になるのがこのクォーター制であろうと思います。海外からの受け入れも容易になりますし、送り出しも容易になるということです。これをしないと、本当のグローバル化にはなかなか向かないだろうと考えております。

### クォーター制の導入 ～考え方

クォーター制の導入の考え方についてよく聞かれるのは、通年制とセメスター制が併存するところにクォーター制を導入すると混乱が起きるのではないかということです。確かに混乱はあると思います。学生は、うまく自分で考えて計画的に履修する必要があります。各学部では、学生にとってわかりやすいよう工夫して科目を設置していただく必要があると思っています。

早稲田大学には13学部あります。文学系、理工系と学院ごとにとまとめても10学院あります。10の学院に対して、本部からすべて強圧的に一斉にこうなさいと言うのは無理だと思っていて、各学部でカ

### クォーター制の導入 ～考え方

- 通年制、セメスター制と併存する形で、クォーター制を導入する。
- 学籍異動(休学・留学)や科目登録、成績発表等は現行の半期単位(年2回)の考え方とする。
- 必修科目や演習、履修要件を持つ科目等、クォーター化に適さない学科目は現行通り配当する。8週間で集中的に講義を行うことで教育効果が高まると考えられる学科目(講義科目や語学科目、オンデマンド科目等)から順次2013年4月以降に導入していく。
- 1科目を2科目に分割する方法と、週時数を2倍にして期間を半分にする方法でクォーター化を導入する。
- クォーター制導入にあたり各箇所での総授業時間数は増やさない。

リキュラムをしっかりと組んでいただく必要があるだろうと思っています。

学籍異動や科目の登録、成績発表を年2回にする、というのがスタート地点での方式です。在学生は3月末、新入生は4月に、コンピューター上で科目登録をします。そのとき、春の前半のクォーター（スプリング）と後半のクォーター（サマー）の両方を科目登録します。例えば、前半や後半の履修を落としてしまった場合に、秋にもう一回取り直すことが必要だろうと思っています。それから、成績発表に関しては、春の前半と春の後半、スプリングとサマーの分の成績を先生方に8月の夏休みにつけていただいて、9月に発表することになっています。秋学期も同じです。つまり、3月末から4月初旬の時期と9月の2回に科目登録（履修登録）があって、成績発表も、スプリングとサマーの分は9月に発表して、オータムとウインターの分は3月に発表すればよいと考えております。

また、先ほども申しましたように、クォーター化に適さない学科目は現行どおりで構いません。8週間で集中的に講義を行うことで教育効果が高まると考えられる学科目については順次導入してもらいたい、と全学に申し上げました。

1科目を2科目分に分割できるならば、4単位科目を2単位にする、2単位科目を1単位にすることも可能です。また、週1回の授業が15週間で2単位となっているセメスター科目をクォーター科目にするには、1週あたりの授業時間を2倍にして期間を半分にする、すなわち、週2回教えて8週間で2単位科目にすることも可能になります。8週間で4単位ということは考えておりません。8週間で2単位か1単位、15

週間で2単位か4単位と考えています。ですから、あまり無茶なことは申し上げていないわけです。

クォーター制導入にあたっては、各箇所でも——この各箇所というのは早稲田の用語で各学部・研究科のことを指していますが——、総授業時間数は増やしません。例えば数学入門とか文学入門などの科目について、同一科目についてクォーター科目とセメスター科目の両方を設置することはせず、どちらかの方式にしてもらいたいと考えました。両方設置すると教員の負担も増えますし、学生も迷いますので、クォーターに向いている科目はクォーター科目に、セメスターに向いている科目はセメスター科目ということに学部ごとに決めていただきたいと考えています。

### 早稲田大学におけるクォーター科目

このようなことを具体的に考えながらクォーター制を進めてまいりました。今はまだまだ少ないのですが、20箇所（7学部、11研究科、2センター）で、昨年度は465科目がクォーター制になりました。今年度は837科目です。まだまだ少ないです。早稲田に

#### 早稲田大学におけるクォーター科目

年度	クォーター科目の設置状況・予定等
2013年度	20箇所(7学部、11研究科、2センター等) 465科目クラス 設置
2014年度	26箇所(7学部、16研究科、3センター等) 837科目クラス 設置
2015年度	クォーター科目 1,200科目クラス設置を目標
2016年度	全学教育機関であるグローバルエデュケーションセンターで本格導入開始予定
2017年度	複数の学部で完全クォーター化予定

は1万7千科目ぐらい科目が設置されていますので、まだまだほんの少しですけれども、努力はしています。2017年度に完全にクォーター制にすると言っている学部が二、三あります。たとえば、私が一番強く抵抗するだろうと思っていた歴史学や哲学のある文学部院の中では、文化構想学部も文学部も17年度には全てクォーター化すると言っています。人間科学部もその予定であると言っています。それ以外では、経済学研究科は既に13年度から、新規に入ってきた学生には全てクォーター科目を提供し始めていますので、徐々に



広がってくるだろうと考えています。

15年度の目標が大体1200科目ぐらいで、これが開講科目全体の10%弱にあたると思います。ですから、まだまだゆっくりです。東京大学はかなり早いですね。15年度に全部やるとおっしゃっていますから、その意味では早稲田の方がスピードが遅いように思います。しかし私どもは、先にスタンフォード大学の歴史学の先生のお話のところでも申し上げましたように、無理やり全ての科目をクォーターにはしない、学長の命令でむちゃくちゃに全てクォーター化することは考えていないのです。それがいいのか悪いのか、我々も少し迷っているところがありながらも、もう少しスピードを上げたいとは考えています。

教職員に理解してもらいたいと思っているのは、誰のためにやるのか、それは結局学生のためだということです。学生が欧米や中国やシンガポール、またはオセアニアの大学に行ったり来たり、帰ってきたりして、本当に積極的にグローバルな教育を受けるためには、このような仕組みをつくらないと無理だということです。どうしても無駄な期間ができてしまう、それをなくすというのが我々の使命だと考えております。

## Waseda Summer Session 2014

クォーター制を入れたことによる実りがあったことについて具体的に示しましょうということで、昨年の夏ぐらいに副学長から指示を受けまして、今年、2014年6月にサマースクールを行いました。このサマーセッションでは、イントロダクション・ツウ・ジャパニーズ・スタディズ (Introduction to Japanese Studies) ということで、日本の政治、ビジネス、歴史、

文化の各入門編を扱いました。それらから2科目選択し、日本語集中プログラムからは1科目とってもらって、日本語の夏季集中講座で日本語を勉強してもらいます。欧米やアジアの大学で日本語を勉強している学生は日本のことを知りたいでしょうし、夏休みに日本に行つて勉強したい人が多いでしょうということで、この時期を選びました。早稲田のクォーター制とは時期が少しずれています。6月7日ぐらいからクォーター制を始めるのですが、韓国と中国が、期末試験が終わるのが6月20日ぐらいになるということでしたので、それにうまく合わせて時期を少しずらして来てもらえるようにいたしました。

コーディネーターも入れ、学生スタッフも雇つて、TAなども雇つて、面倒を見ることにしました。海外の各大学の学生80名、早稲田の学生は20名、それも、海外の留学から帰ってきた学生を中心に受けさせることにしていました。最終出願者数は116名で、合格した者が108名、事情があつて急に来ることができなくなった人もいたので、最終的に82名が参加しました。内訳は、早稲田生が9名で、海外の学生が73名となり、最初の年のサマーセッションは盛況に終わりました。途中で軽井沢のセミナーハウスに連れていってあげるなどしつつ、早稲田にいながら、海外の学生と早稲田の学生が机を並べて勉強できるようにしたのです。留学すれば当然それは可能ですが、早稲田にいながらでもできるようにしたいというのがこの試みです。

クォーター制については以上です。残りの時間で、西澤学長先生がおっしゃっていたグローバル化教育をどう考えるかについて、我々が考えていることの一部をご紹介して終わりたいと思います。

## 海外との交流以外の4学期制の意義 — Gap Termを学生が主体的に計画—

我々は、ボランティア活動をとても重視しております。毎年9千人が登録しています。早稲田の定員がだいたい9,300名ぐらいですから、9千人というのは、ほぼ1学年の人数に匹敵します。リピーターがいるため必ずしも全員ではありませんが、1学年が4年間のうち1度は登録しているとすると、ほとんど全員が最低1回はボランティア活動をしていることになりま

**Waseda Summer Session 2014**

- ・ 実施期間 2014年6月23日(月)～7月18日(金)【春後期集中・4週間】
- ・ 実施場所 早稲田キャンパス
- ・ 提供科目: 日本の ①政治 ②ビジネス ③歴史 ④文化 各入門編
- ・ 科目登録: 2科目選択+日本語集中プログラムから1科目履修可能
- ・ 教員数: コーディネーター1名、授業担当4-6名(学内2-4名+海外招聘2名)
- ・ 学生スタッフ 8名雇用(TA 4名+課外活動補助4名)
- ・ 参加学生 ① 外国大学在学中(大学1-2年生) - 成績証明書発行・単位認定  
② 留学直後の本学学生等 - 単位認定
- ・ 出願条件 ① 海外大学在学中の学生 / GPA2.5以上 / TOEFL80点(550点)以上  
② 2013-2014期に留学中の本学学生等
- ・ 選考 有(200字程度の志望理由書)
- ・ 定員 100名(海外学生80名+早大生20名)  
⇒ 最終出願116名⇒合格者108名・最終参加者82名(海外学生73名・早大生9名)
- ・ 6/21(土) オリエンテーション
- ・ 7/12(土)、13(日) フィールドトリップ(軽井沢セミナーハウス)

10



### 海外との交流以外の4学期制の意義 —Gap Termを学生が主体的に計画—

- ★ボランティア活動の参加
  - 早稲田大学ボランティアセンター：毎年9,000名登録して活動—海外でもボランティア活動
- ★企業・自治体と提携した問題解決型教育の促進
  - インターンシップへのより柔軟な参加
  - プロフェッショナル・ワークショップへの参加促進
- ★教職課程における教育実習への柔軟な参加

す。実際には、在学中ずっと活動する学生もいれば、全くしない学生も出てきますが、それでも、半分ぐらいの学生はボランティアを1回は経験しているように見えます。

それから、企業・自治体と提携した問題解決型教育を促進していて、プロフェッショナル・ワークショップというものをいろいろやっております。インターンシップへの参加や、プロフェッショナル・ワークショップへの参加、教職課程の実習などは、クォーター制だとやりやすいのです。

ボランティアに関しては、例えば東日本大震災や、広島島の土砂災害などのときに、6月から2カ月間もしくは8週間、大学を休学して行きたいと思う学生がいたとします。しかし、授業は4月からある、6月にどこかで台風被害が起こって助けに行きたいと思った学生がそのセメスターの途中でボランティア活動に出かけてしまうと、4月からの単位を全て失ってしまうわけです。しかしクォーター制ですと、4月から6月6日までの授業には出ることができて、そこでの単位は確保できます。サマークォーターだけ休学すればよいのです。これは秋のクォーターでも、冬のクォーターでも同じ扱いになります。インターンも教職課程の実習も2カ月もしくは6週間ですので、その学期を丸々無駄にせず外に出ていくことができます。インターンシップ、教職課程、ボランティア活動、災害救援などを含めた活動、いわゆるプロジェクト・ベースト・ラーニング（Project-based Learning: PBL）といいますか、そのような実地教育やフィールドワークを伴う教育を受けるためには、クォーター制は非常に柔軟性があり向いていると考えています。そ

の意味では、ある年に全学年が一斉に画一的にギャップ・タームをとるのではなくて、早稲田の学生の個々人の主体性によって、4年間のうちのどこでギャップ・タームをとるかを計画してもらいたい、そのためにクォーター制は非常に効果的であると考えております。

### 社会貢献力：教育的社会貢献活動

#### 社会貢献力: 教育的社会貢献活動

##### 平山郁夫記念ボランティアセンター(WAVOC):

- 教育支援、人権、環境、音楽、スポーツ分野で支援プロジェクトを展開。
  - タンザニア、ミクロネシア、ブータン、ラオス(ほか)、国際教育交換協議会を通じた国際ボランティア活動を推進。
- < WAVOCからオープン教育センターへ演習と講義1科目提供 >
- ・ 行動する国際人の育成
  - ・ 自分出来ること、社会の在り様について考察



杉原千敏・奥克彦を生んだ  
伝統を継承！  
進んで社会貢献する人材育成！

ボランティア活動に関して、典型的な例をご紹介します。学生たちは、東ティモールに行ったり、エチオピアに行ったり、さまざまな活動をしています。日本の国内で富士山のごみ拾いをしていたりもします。典型的なものとしては、日本人の学生が、韓国から留学してきた学生と一緒に、ラオスの過疎地に小学校をつくった例があります。ハングルを話す韓国語の学生と日本人の学生とで英語で片言でしゃべりながら、彼らは夏休みにラオスに行って、秋に帰ってきて、東京で募金活動をして、必要なお金をためて、また春休みにラオスに行くということを繰り返して活動してきました。この活動は何年間も続いております。このようなボランティア活動というものも、グローバル化には非常に役に立っていると思っていますし、クォーター制によって促進できるだろうと思っています。

#### ICC（国際コミュニティセンター）

それから、外国人の学生と日本人の学生が交互に教え合う国際コミュニティセンターがあります。例えばフランス語と日本語とか、中国語と日本語とか、多くは英語と日本語ですが、お互いに教え合って、さまざまなイベントを一緒に行っています。

## 学生の声（体験談）

学生の声について申し上げますと、日本人の学生からは、「クォーター制は良い制度だと思う、さらに柔軟性を高めていただくともっと良くなるのではないか」、「クォーターごとに成績を出してもらえればよい」、「今は半年に一度だが、履修計画を練り直して次のクォーター科目が履修できるように、もっと頻繁に

### 学生の声（体験談）＜1＞

- 経済学研究科修士1年生(日本人学生):

クォーター制は良い制度だと思う。さらに柔軟性を高めていただくと、もっと良くなるのではないか。できればクォーターごとに成績を教えてください。履修計画を練り直して次のクォーターの科目登録が出来ると思う。

今はクォーターと semester の科目が混在しているが、すべての科目をクォーター化した方がよいと思う。

- 学部3年生(留学生):

すべての科目がクォーター化すれば試験のタイミングが分散して学生の負担は減る。韓国では22ヶ月間の兵役が課せられているので、クォーターのどのタイミングでも復学ができればありがたい。

微調整したい」、「全ての科目をクォーター制にすれば、試験のタイミングが分散して、学生の負担が減る」というような意見が出ています。それから、「韓国では兵役が課されており、クォーター制ならどのタイミングでも復学できるので、促進してほしい」という留学生からの意見もありまして、どのクォーターからでも入れるようにしたいと考えています。このような要求が出てくることは、我々にとっても勉強になると思っています。

こちらは日本人の学生の意見です。「6月が中休みするので、そこで終わるのはよい、週2回の授業は密

### 学生の声（体験談）＜2＞

- 学部3年生(日本人学生):

6月あたりは中休みする時期なので、そこに春学期前半のクォーター科目の試験が行われるのは刺激になって良い。

週2回の授業は密度が高く、一度欠席してしまうとついていけない。そのあたりのフォローアップ体制があると嬉しい。

現時点では、サマースクールやボランティアへ行くことは考えてないがクォーター科目が増えてくれば、そのようなことも視野に入ってくるかもしれない。

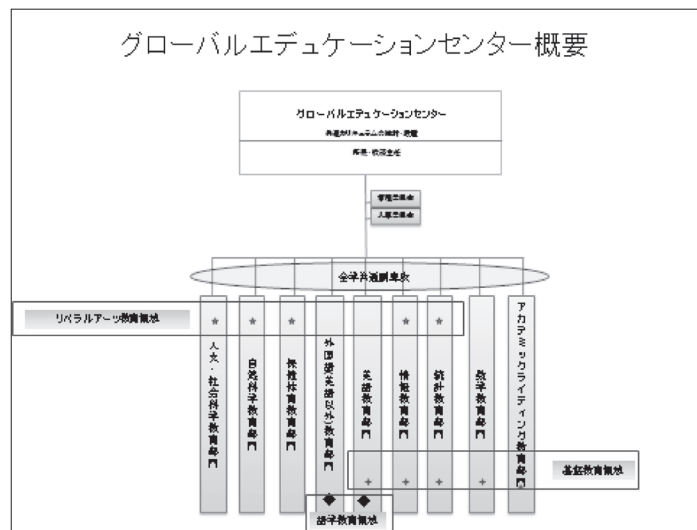
留学に行かないまでも、就職活動で忙しいことが予想される時期は履修科目を少なめに、他の時期に多めに履修するなど、学生の意思で濃淡を付けられるのは、良いことだと思う。

度が高く緊張感がある」、「サマースクールやボランティアに行きやすい」、「留学に行かないまでも、就職活動で忙しいことが予想される時期は、履修科目を少な目にし、ほかの時期に多めに履修するなど、学生の意思で濃淡をつけられるのはよい」などです。やはり学生の主体性を生かせるところに、クォーター制のメリットがあるだろうと考えております。

このような学生の声をできるだけ多くの早稲田の教職員に伝えて、なるべく早く全学的な実現に向かいたいと考えております。一方で、やはり、価値観の共有が一番大事だと思っております。例えば教務担当理事が怒鳴りまくってやれ、やれと言うより、学生がどう思っているかを我々が知って推進していく方が効果があるのではないかと考えております。

## グローバルエデュケーションセンター概要

昨年4月にグローバルエデュケーションセンターを作りました。かつてオープン教育センターとして作っ



ていたものを、学部の垣根を超えて教えられる場所としました。この件については、時間があればお話し申し上げたいと思います。

### Tutorial English

チュートリアル・イングリッシュというものを、10週間やっております。ここでは、ネイティブの教員、バイリンガルの教員1人に、学生が4名、非常にきめの細かい1対4の語学の授業が行われています。現在、1年間で9千名が履修しています。英語で発信することを重点に、週2回行っています。1回目は教員と話をし、課題を出して、2回目の授業までに400ワード程度の短いレポートを英語で書いて、インターネットを介して提出します。教員は、次の2回目の授業のときに、レポートについてコメントしながら英語で授業をします。英語で書くのと話すのをあわせての発信の授業をしています。これも、現行の10週間を8週間にして、クォーター制に合わせるとよりうまく回るのではないかと考えております。

### Writing Center

ライティング・センターも設置されており、英語と日本語の文章指導をしています。

### コース・ナンバリング（Course Numbering）の導入：2015年度～

コース・ナンバリングについては、今2015年度から全学で導入しようとしているところです。体系的な授業にしていくということで、クォーター制とあわせて、グローバル教育のための仕組みとして考えていま

す。

### 早稲田大学のグローバル教育－4学期制とGlobal Education Center－

今、早稲田での留学件数は、送り出しが1,800名、受け入れが4,500名、1年間を通じてどちらの数も日本で一番多いです。これらをもう少し推進していきたいと考えております。

#### 早稲田大学のグローバル教育 －4学期制とGlobal Education Center－

- ★4学期制(Quarter System)の導入と活用
- 4学期制とSummer SessionでGlobal教育提供
- 海外から教員を短期間招聘し教育効果向上
- 留学生の受け入れ・送り出しの促進(倍増予定)  
4,500名→9,000名・1,800名→9,000名(全員)
- 全学全科目のコース・ナンバリング実施(2015～)
- ★Global Education Centerにおける多角的教育
- 国際発信できる人材の育成

大分長くお時間を頂戴いたしましたが、以上でございます。どうもありがとうございました。(拍手)

#### コース・ナンバリング(Course Numbering)の導入：2015年度～

- 各学部とGlobal Education Center(GEC)の連携
- 全学に共通の考え方でコース・ナンバーを振る
- 複数学部に共通のナンバーを作成する
- Global Education Center (GEC)と各学部に通の科目 or 各学部間で共通の科目は、コード・シェア(Code-Share)をする
- 各学部のリソースを全学の学生に提供する